

発行所 (郵便番号100)

東京都千代田区丸の内2-4-1
丸ノ内ビルディング781号室
社団法人スウェーデン社会研究所
Tel (212) 4007・1447

編集者 中嶋 博
責任者

印刷所 関東図書株式会社
定価200円 (年間購読料参千円)

1986年12月25日発行

第18巻 第12号

(毎月1回25日発行)

昭和44年12月23日第3種郵便物認可

スウェーデン社会研究月報

Bulletin Vol. 18 No. 12

Japanska Institutet För Svensk Samhällsforskning
(The Japanese Institute for Social Studies on Sweden)
Marunouchi-Bldg., No. 781. Marunouchi, Chiyoda-ku, Tokyo, Japan

スウェーデン研究に当って

On the Study of Sweden

顧問 小野寺 百合子
Adviser, Mrs. Yuriko Onodera

スウェーデンを研究するときには、いずれの分野でもまず大切なことは、日本とスウェーデンがどんなに異っているかを認識し、その上で学習を進めることである。国が違えば何かと異なるのは当たり前とわかり切ったことが案外忘れられ勝て、両国を比較してやたらに感心したり、または頭からけなしたりするのはまことに危険である。

例えば老人問題で、スウェーデンで同居という項目は結婚届をした夫婦と結婚届はしていないが事実上夫婦生活をしている所謂同棲者との総称で、それが65才以上の半数以上を占め、一人者の老人の世帯が40%ほど、残りが兄弟や友人との同居と子との同居である。日本では現に三代世帯が半数を上まわっており、さらにそれを希望している数は相当にある筈である。別居とは夫婦だけが単身世帯かである。しかも日本では同居とは扶養の意味が含まれている。これほどに違う老人に対する施策が両国に通用するわけがない。然し個々の問題をよく検討してみると共通点は多分にあり、日本がスウェーデンに学ぶべき点は制度にしてもアイディアにしても多々ある筈である。

その一つは老人ホームである。スウェーデンの老人ホームは殆どが地方自治体立で、料金は国民年金の70%、その他の収入の80%を納入すればすべての老人に開放されている優秀な施設である。日本のホームも有料制にはなったが公立のものには中産階級は受入れてもらえない。有料ホームと称する私立のものはひと財産無ければ入居権さえ得られない。大多数の中間層の老人にとってスウェーデンは羨ましい限りである。ホームの立派さ

に感心するばかりでなく、この点何か示唆は得られないものだろうか。

また児童問題についても1例を挙げてみよう。子供が総合高等学校に進学すると児童手当は20才まで延長となり、学校と自宅が遠いと下宿代や帰省費が支給され、通学に要する交通費が支給される。日本ではそんなことまで出来るものか福祉の行き過ぎだと一蹴されてしまうことがある。現実には日本でそのまま実現できないことはわかっているが、それを知ることが全く無意味であろうか？子供の教育は親の収入にかかわらず、地理的距離の関係も公的にカバーされ、子供に進学の意志と能力さえあれば、すべての子供に進学のチャンスが与えられているというスウェーデンの方式には感心させられる。子供の学ぶ権利を全く平等に取扱っている精神を十分に汲み取らなければならないと思う。

目次

スウェーデン研究に当って…小野寺百合子…	1
リュートフィスク……………石井新太郎…	2
(ニュース) T. フセーン教授来日……………	4
マリアンネ・ヴェディーン女史	
コンピューター教育を視察……………	4
スウェーデン人のバカンスと行事……………	4
昭和61年度研究月報目次一覧……………	6

リュートフィスク

Lutfisk

スウェーデン大使館広報部 石井 新太郎

Mr. Shintaro Ishii

太陽が白い小さい円板になって、重い鈍色の雲の波間によろやくちらりと姿を見せたかと思っていると、もう黄昏が訪れる。11月の湿った闇は暗く冷たい。イェルデットの散歩道の落葉松も榎も白樺も木々はすっかり裸となり、何時やむとも知れぬ霧のような小糠雨にそば濡れて黒く、寒々しく、気の滅入ること甚だしい。水銀灯の青みを帯びた冷たい光の円錐体の外は一面の闇世界。死んだ夏のなごりの枯れ草が林の中に亡霊のように立つ。外灯の光の中で細かな雨滴が空中に一瞬静止し、風に流されて斜めに落ち闇の中に消えていく。日はこれから益々短くなる。春も夏も遙か彼方、この同じ野づらが再び青々と生き返ることさえ嘘のような錯覚を覚えてしまう。日一日と太陽は、心細くなるほど力も活気も失っていき、勢力を拡大し益々横暴になると夜と闇をはばかり避けるように厚い雲の陰に隠れ、滅多に顔を見せることがない。北欧神話のラグナリョークだ。神々の黄昏だ。冬が世界を支配し、もう夏は永遠にやってくる。

そんな暗い心にアドヴェント蠟燭の初めの一本が灯される。心無しかゆううつだった気分が軽くなる。町の商店街がユール（クリスマス）のイルミネーションで飾られる。日曜日ごとに新しいアドヴェント蠟燭に火が点されていき、四本目の蠟燭に火が灯り、アドヴェント燭台に階段状に長さの違う蠟燭が四本とも燈されるとユールは目の前だ。

ユールの市が立つ。野外博物館のスカンセンでもやるが、ストックホルムの中心、中世の石造りの町並みの残るガムラスタン、旧市街のストゥールトルイェット広場の市も規模の大きなものである。市の立つビョッスビューセット（証券取引所）の前のこの石畳の広場には、真ん中に古めかしい大きな手動のポンプを備えた井戸があって、普段は静かなたたずまいを見せている。

トゥンネルバーナ（Tバーナと省略される）とよばれる地下鉄のくすばけた緑色の列車は、中央駅、

Tセントラーレンからごとごとと、ガムラスタン駅に向かうと、スリュッセンで再び地下にもぐるまでの暫しの間地上に出てくる。プラットホームから階段を降り、改札口を出て地下道を歩き、ムンクブルッガータンの出口から地上にでる。ムンクブルッガータンを少し中央駅方向に戻り、交差するコークプリンケンを右に曲がる。左手の建物は郵便博物館だ。入口は人通りのあまりないリッラニョーグタータンにある。次の通りがストゥラニョーグタータン。さらにコークプリンケンを歩いていくと道はいつも観光客で賑わうヴェステルロングタータンと交わる。ここからストゥルトルイェットまで、道は急な登り坂となる。プレストガータンの角の家の基礎石の一つにルーン碑石の断片が埋めこまれている。ここまできると広場のどよめきが賑やかに伝わってくる。胸がほのほの熱くなる。祭の興奮とでも言おうか。このコークプリンケンだけでなく、広場に通じる道の入口は、王宮の方に出るトロングスンドもシェッラルグレンドも、プレストタータンに出るスゥールグレンドも、アンティックの店の並ぶシェーパマンタータンも、それぞれドイツ教会に向かうスヴァットマンタータンもスクーマーカルタータンも赤いトムテの衣裳を付けた背の低い物売りが両手一杯色とりどりの紙の笛や天使のシールを真ん中に付けたツリーの飾りなどを売っている。広場には屋台が所狭しと並び普段とは全く違った雰囲気醸成している。

お祭の嫌いなほうでは無い私は、このざわめきと雑踏にひとりでの顔がほころびつつ嬉しくなってしまうのを抑えられない。子供たちは興奮してきゃーきゃー騒いでいるし、集まっている大人たちも上機嫌だ。スウェーデンにこんな人込みがあったのかと改めて感心してしまうほど人が集まってくる。

気の早い日はもうとつぷりと暮れはじめ、ちらほら白いものさえ風に乗って舞い落ちてきた。薄暮れの中に裸電球の黄色い暖い光が次第にくつき

りしだす。ざわめきに混じって一種独特の強い香料の匂いが漂う。屋台で透明な小さなプラスチックのグラスを沢山並べ、ほかほか湯気を立てた赤黒い液体を売っている。匂いはそこから流れてきた。髭づらの若者も毛皮の防寒帽を被った恰幅の良い紳士も毛糸帽子のあから顔のおばさんも嬉しそうに買って飲んでる。乾しぶどうと皮を剥いたアーモンドが丸ごと幾つか入っている。グリュッグという赤ワインでつくった飲み物だった。カードモン、肉桂、オレンジピール、ジンジャー、クローブスで香り付けをし、ソッケルトップという円錐形に固められた砂糖で甘味をつける。温めて乾しぶどうとアーモンドを入れて飲む、大層体の温まる飲み物だ。袋入りの香料や、エキスにしたものも売られている。トロングスンドにひっそり目立たない店を構えている公営酒店のシステムブラーゲットへ行けば、温めるだけで飲めるユールグリュッグもある。

店はロッテリーと呼ばれる福引の店が多かった。円筒に巻いた紙のくじを開くと番号が書いてあり、当たっていれば何か貰えるわけである。子供向けにぬいぐるみの動物とか、家庭向きの日用品のあたるものとか色々あったが、変わったものに、くん製のうなぎが当たるものがある。うなぎと言っても日本で普通に食べられているような小さなものではなく、長さが1メートル以上もある大型の青大将みたいな代物を丸ごとくん製にしたものだ。この太い油ぎって長いうなぎが何本も壁に吊るしてあり、日本人の私には異様に不気味でそれはそれは壮観であった。それを当てようと皆くじを買っている。一等賞はこれが丸ごと当たるのだ。

リースやツリーの飾り、キャンデーなどを売るとりどりの店を一通り見て、結局何も買いはしなかったがすっかりユール気分になりきって帰途についた私は、気が大きくなって下宿のすぐ近くにあるスーパー、リングヴェーゲン136のICAの店でふらふらと前後の見境を無くし、リュートフィスクを買ってしまった。

スウェーデンに渡った初めての年の初めてのユールのことである。普段切り詰めた生活を送っていたがやはりクリスマスくらいは、スウェーデン人の食するというクリスマスの御馳走を食べてみたいという気にもなろうというもの。もちろん生活費に限度があるので、せめて一品くらいはと

思っていたところ、意外に安い値段でアルミホルの容器に入れられた大きな白身の魚の切り身が液体にぶよっと浮かぶこのリュートフィスクが並べられていたものだから、ついつい買ってしまったのだ。

リュートフィスクは、ロンガとよばれる鱈科の魚を日干しにしたものを水で戻し、ソーダと消石灰による処理を2〜3日施したものである。水に十分浸けたあと水煮する。子供たちにはあまり歓迎されないようだ。おせち料理の数の子のようなものだろうか。ただ、古来ユールには絶対つきものだし、無くてはならないものとなっている。普通、付け合わせというじゃがいもであるが、この料理は、じゃがいものスウェーデンに伝わるよりもさらに昔のヴァイキング時代から伝えられているので、えんどうまめが付け合わせとなる。大人には懐かしく欠かせない料理である。フィンランドとの国境の町ハバランダのヨハンソンさんによばれてユールと一緒に過ごしたことがあるが、ゆでてホワイトソースをかけ、グリーンピースを添えたリュートフィスクが、大層美味しかったことを記憶している。

さて、クリスマスイブまでしばらく冷蔵庫の片隅に鎮座していたアルミ容器のリュートフィスクは、日が暮れるとキッチンに取り出された。下宿していたのはユーゴスラビア人の出稼ぎ移民の家であった。勿論リュートフィスクなど食べもしないし、調理法だって知らないから聞くわけにもいかない。白身の魚だからムニエルにすれば旨だろうと大胆にも思い付いた私は、アルミ容器に入っていた液体は捨て、水洗いしてから食べやすい大きさに切り分け、塩コショウして小麦粉をまぶし、唯一の家財道具だったフライパンに入れて焼いた。

じゅうじゅう景気のよい音がフライパンから上がりはじめ、切り身からはじゅくじゅくと水が出てくる。水切りが悪かったかな、でもすぐ止まるだろうと思っていたが、出てくる水は全然止まらず、しまいにはフライパンからあふれそうになってしまった。仕方ないのでその水を流しに捨ててしまい、また新たに焼きはじめる。魚はどんどん小さくなっていき、その分水嵩が刻一刻と増えていく。数人分の大きさのあった切り身は二度水を捨てた後、半人分の大きさとなっていた。

決して旨くなかったその味と共にユールに近づくと思出す失敗である。

T. フセーン教授来日

当研究所と関係の深い教育研究・改革の世界的指導者であるストックホルム大学名誉教授・スウェーデン王立科学アカデミー会員のT. フセーン博士 (Prof. Torsten Husén)には、中国訪問の帰途、去る11月26日来日され同月28日まで滞在された。

当研究所の西村光夫理事長および中嶋博常務理事は、ご滞在先を表敬訪問し、教育問題などにつき懇談した。

マリアンネ・ヴェディーン女史コンピューター教育を視察

スウェーデン地方自治体連合会教育コンサルタントのマリアンネ・ヴェディーン女史 (Dr. Marianne Wedin)が、さる10月23日、東京都足立区立伊興中学校のコンピューター教育を、当研究所中嶋博常務理事の案内で視察された。

東京都教育委員会の紹介による中学校のレベルでモデル校とされる同校の場合、技術科でCAI (コンピューター補助学習) に7台が使用されていたが、終始熱心な質問をされていた。

スウェーデンでは、1984年から基礎学校の第7学年 (我が国の中学1年に相当) からコンピューター教育が必修となり、今日各学校で最低20台が用意されているなど、我が国のコンピューター教育の立ち遅れが、歴然としたことであった。

スウェーデン人のバカンスと行事

スウェーデンの労働者は、法律上、年五週間の有給休暇をとる権利があります。大概のスウェーデン人は、土曜日は休みます。年間の労働時間は約1,700時間で、今世紀初頭の3,000時間以上に比べれば大変な違いです。つまり余暇が大いに増えたわけで、それを活用するだけの経済力も増えました。

自 然

大自然に接することは、スウェーデン人にとって大事なことです。スウェーデン独自の伝統である「公共利用権」により、だれの所有地であろうと、自由に森や野原を歩き、草の実を摘んだり、キノコ狩りをしたり、泳いだり、岸辺にボートを着けることができます。もちろん、環境を破壊したり、ごみをちらかしたりしないことが条件です。現在では湖畔や海岸での建築は厳しく規制され、これらの地域を一般に開放しています。

スウェーデンの高原はよく「ヨーロッパの最後の原野」といわれます。こうした山をハイキングし、冷たいさわやかな溪流に憩うのも、自然の美しさ、静けさに触れる方法ですが、都市のすぐ郊外にも森や牧場が広がり、自由に散策ができます。

祝 祭 日

スウェーデンの祝祭日には、宗教的なものと世俗的な由来のものがあります。祝日に伴う習慣の

中には、農業社会の年中行事に起源を発するものが少なくありません。

イースター

イースターには異教徒の春祭りの影響が見られます。例えば彩色したイースター・エッグや、ほろきの柄にまたがって空を飛ぶ魔女などがそれです。

ワルプルギスの夜

4月30日の夜は春の訪れを祝い、スウェーデン各地で大きなかがり火がたかれ、合唱が聞かれます。

ミッドサマー

6月下旬の夏至のころには、夜はほんの2～3時間しかありません。花で飾ったメイポールの回りを踊る習慣は、古い豊穰の儀式的名残です。

ざりがに

暑い8月の夕べ、人々は茹でざりがにを冷やして、スナプスと呼ばれるスウェーデンの酒で胃袋に流しこみます。色とりどりのチョウチンがこの伝統料理に輝きを添えます。

ルシア

12月13日にはキャンドルのついた冠を戴いた少女——ルシアが朝早く人々を訪れます。彼女は長い冬の闇のあとに再び光が戻ってくるという希望の象徴です。

クリスマス

スウェーデンがキリスト教国になるまで、クリスマスは冬至を祝い祭でした。今日のクリスマスの習慣は、他国と大して変わりません。しかしイ

ブに出されるごちそうは、スウェーデン独特のものです。

(スウェーデン文化交流協会発行資料より)

< S I P ニュース >

スウェーデンの知的障害者の新目標は生活の標準化と独立

スウェーデンでは知的障害者のためのサービスに関する新法規が本年度7月1日より実効となった。スウェーデン厚生福祉庁の障害者保護部局長を最近退職したカール・グルネヴァルド博士 (Dr. Karl Grunewald) によると、新法は、知的障害者の生活を標準化して彼らを社会に統合すると共に、大規模な制度化されたケアというものを事実上排除するために案出されたということである。

知的障害者の専門的なケアに関する新法は、彼らが標準あるいはそれに近い生活を送るのに必要であるとみなされる一連のサービスを提供するが、これは、知的障害児にとっての家庭もしくは養家での生活を意味するものである。成人の場合は独立した生活あるいは、小グループの家庭の方が好まれる傾向にある。1984年度の統計によるとスウェーデンの知的障害者(成人)の約30%(7,000人)が、目下、120の大きな住居ホームや専門病院で暮しており、この種の施設の段階的廃止とその在住者の漸減を目的とする別の法律もある。ただし、このプロセスを実施するに際してのタイムリミットは設けられていない。現在、スウェーデンの知的障害児1万3,000人のうちの約4.5%が、住居ホームで、75%が自宅で生活を送っている。

新法は、その施行に州議会と地方自治体が責任を持ち、知的障害者の生活の一層の標準化と独立化の促進を目的とする一連のサービスを提供する。なお、このサービスの中には、教育を受けていない成人の失業者に対する、ディアクティビティセンターでの毎日最低3時間の義務的活動の提供や家族及び介護者に必要な休息を与えるための短期的な外泊といった措置が含まれる。また、新法には、ボランティアをベースとする人的つながりに関する特別な取り決め——アドバイスや支持を提供したり、最近親者との接触を補足したりすることのできる個人または家族が含まれている。

新法の中核をなすのは、知的障害者が社会の他のメンバーよりおとった生活状況にあってはならないという原則である。すなわち、現行の制度、活動、学校教育も、できるかぎり多くの周辺社会の日々の生活に統合されるべきであり、さらに、生活状況やサービスを、決して強制的にはなく、知的障害者やその最近親者等との協力の下に、整えていく必要があるという考え方である。なお、ほとんどのサービスが無料で提供される。

スウェーデンには、現在、約3万5,000人の知的障害者と認定される人々があり、この数値は、過去10年にわたり変わっていない。グルネヴァルド博士によると、専門的なサービスを必要とするスウェーデンのほとんど全ての知的障害者が既に認定されたとするに十分な理由が存在するということである。

会員の皆様へのプレゼント (スウェーデン大使館より)

スウェーデンの英文ビジネス雑誌、“Marketplace Sweden”(70頁)が、86年第3号で日本特集を組みました。御希望の方に差し上げますので、A4版の返信用封筒に御住所を御記入のうえ、240円分の切手を貼って、下記いずれかまでお申し込み下さい。残部切れの場合は御容赦下さい。

スウェーデン大使館 商務部：106 東京都港区六本木6丁目11-9

スウェーデンセンタービル2F

スウェーデン大使館 広報部：106 東京都港区六本木1丁目10-3

昭和61年度研究月報目次一覧

- No.1 新年を迎えて……………西村 光夫 (ニュース)
 謹賀新年……………松前 重義
 Message to the New Year's issue of
 the JISSS Bulletin ……ルバック報道官 スウェーデン企業の哲学を探る大型視察団
 New Year's Message…………… 放送文化基金賞
 ……ウルバン・ダールレーフ氏 No.7.8 チェルノブイリ後とスウェーデン ……
 (新刊紹介) バルト海のほとりにて…………… ……原 剛
 ……(小野寺百合子著) (ニュース)
 研究所の活動メモ (昭和60年) スウェーデン大使ご夫妻ならびに
 ……ルバック報道官ご夫妻の送別会
 ……スウェーデンの夏……………三瓶 恵子
 (研究会報告)
 ……婦人問題研究会……………(三瓶恵子)
- No.2 最高のお土産……………安田 陸男 No.9 スウェーデンと国際政治……………三宅喜二郎
 スウェーデン労働者基金の具体化…………… (北欧幼児保育調査視察団報告)
 ……丸尾 直美 北欧の幼児保育の現状……………荒井 洌
 (研究会報告) 小さいうちから美しいものを
 ……見せることの大切さ……………北川 正子
 ……高齡社会研究会……………(三浦文夫) 性教育の絵本を見る……………佐々木和子
 ……福祉問題研究会……………(岡沢憲美) きょうだいグループに共感する……………
 ……下田 典子
 ……ユニーク探しの旅……………鈴木美也子
- No.3 アルバ・ミュルダール女史を悼む…………… No.10 初秋の欧州を訪ねて……………西村 光夫
 ……小野寺百合子 スウェーデンの産業と産業政策……………
 ……スウェーデンの幼児保育について ……Dr. カール・フレデリクソン
 ……注目したいこと……………荒井 洌 (新刊紹介) ……「われら北欧人」
 ……1986/87年度予算案について……………松下 正三
 (ニュース) No.11 広告主のほうがり証せよ……………潮見憲三郎
 ……学際研究代表団歓迎会 人種差別に挑む……………原 剛
 (ニュース)
- No.4 パルメ首相を悼む……………岡野加穂留 駐日スウェーデン大使および
 ……パルメの悲劇……………原 剛 大使館報道官のご交替
 (研究会報告)
 ……(Göteborg 通信) 家計の問題…………… ……幼児保育問題研究会……………(荒井洌)
- No.5 スウェーデンの公的扶助制度……………城戸 喜子 No.12 スウェーデン研究に当って……………小野寺百合子
 ……シェルヴオンゲンに岩面彩画遺跡を ……リュートフィスク……………石井新太郎
 ……尋ねること……………菱木昭八郎 (ニュース)
 ……(Göteborg 通信) 1986の春……………三瓶 恵子 T. フセーン教授来日
 ……マリアンネ・ヴェディーン女史
 ……コンピューター教育を視察
 ……スウェーデン人のパカンスと行事
- No.6 ロバート・エリクソン教授の現代福祉国家 No.12 スウェーデン研究に当って……………小野寺百合子
 ……の問題と展望について講演…………… ……石井新太郎
 ……丸尾 直美 (ニュース)
 ……T. フセーン教授来日
 ……マリアンネ・ヴェディーン女史
 ……コンピューター教育を視察
 ……スウェーデン人のパカンスと行事
- 昭和61年度通常理事会・総会
 ロバート・エリクソン教授の来日
 (研究会報告)
 ……都市交通問題研究会……………(小山徹氏)
 ……老人医療問題研究会……………
 ……(ベルテイル・ステーン教授)
- 昭和61年度研究月報目次一覧